

美術専攻 洋画研究領域

シュウ イナン

周 依楠



lost and found

油彩、アクリル、クレヨン、色鉛筆、木炭、砂、カンヴァス、パネル

lost and found

野生で神秘性を帯びたジャングルのような空間において、子どもたちがワニにいたずらを試みる場面が立ち現れる。猛獣は小さな子どもたちに見えつづけているように見えるが、その尾だけは執拗に反抗し、再び人間を転ばせようともがいている。宙を横切るスケートボード、こぼれ落ちるアルコール、漕がれるブランコ、頭上のニワトリ、損傷した小舟。子どもたちが拾い集めた異物の群れは、この巨大な森の内部では不協和でありつつも、どこか調和を生んでいる。大きなヤシの木は空間全体を包み込む庇蔭のように広がり、植物と川は小舟や木屑、飛び交う虫、粉々になった星々までも巻き込み、硬質で甘やかな空気を形成している。繁茂する葉は、目の静謐を暴力的に切り裂くように広がっていく。

空白のパネルの前に立った瞬間、こうした混沌と祝祭性を帯びたイメージが突如として生じた。特定の意図や目的を先立てたわけではなく、私はただ自らが知覚した光景をそのまま修了制作「lost and found」へと転写した。研究テーマである「自らの感覚や知覚を巡る絵画」が示すように、私の制作は常に偶発的であり、私は自身の感覚と思考が喚起するイメージ、エネルギー、情動を最大限に信じ、それらを視覚的な絵画として提示してきた。

今までの研究では、絵画行為に加え、哲学、心身医学、文学、政治、人類学など、多様な領域が美術に及ぼす影響とその相互関係を参照している。美術とは人間の潜在性や本能を解放し刺激するだけでなく、宇宙的なエネルギーを延伸し再構成する営みであると私は考える。急速に変化する現代社会において、個人と社会は密接であると同時に乖離しており、経験、記憶、意識、知覚、感受、思考、判断、認識などが複合的に働きながら私を形づくり、生活や体験、即興的な創造へと導く力となっている。

制作過程において私は、潜在する可能性と偶然性に特に価値を置いている。そのため、伝統的な技法や画材だけでなく、ステンレスたわし、フライ返し、清掃ブラシといった日用品を描画具として用いることがある。また、油絵具、色鉛筆、木炭、砂、クレヨンなど多様な素材を組み合わせ、道具や素材、構図、色彩といった絵画を構成する要素を解体し再構築している。自己のアイデンティティと語りの確かさをイメージの中へ重ね、反復的に記述する行為は、私自身と世界の存在を確認し、同時に動揺させる試みでもある。自らの身体性と感覚を起点とし、時空的な制約を超えて「現在」を共有する場をつくり出したいと考えている。そこには文化の規範、国籍による境界、性別への偏見、権力の視線、意味の固定化といったものは存在せず、純粋な感覚と気づきだけが残る。注意が宙づりになる一瞬において、理性と情動は内的秩序と外界を架橋し、あなたと私のあいだには本質的な差異はない。そこに響くのは、ただ脆弱な風だけである。